

ずっと地球で暮らそう。



2005

2004年度コスモ・ザ・カード「エコ」活動報告書

第3期：2004年4月1日～2005年3月31日

ごあいさつ

コスモ・ザ・カード「エコ」の発行、そしてコスモ石油エコカード基金の設立から3年が経ちました。約77,000人の会員の皆さまに支えられ、『ずっと暮らせる地球』を思い描きながら進めております6つのプロジェクトは、その一つ一つが現地にしっかりと根をはやし、枝葉を広げながら着実に成長しております。そのことを、この報告書を通して会員の皆さまにお伝えできますことを、たいへん嬉しく思うと同時に、日々支えていただいております皆さまに、心から感謝申し上げます。

今年3月、わたくしはシルクロード緑化プロジェクトで沙棘を植林し、管理して下さっている劉さんの農園を訪れました。当地に向かう飛行機の窓から外を見ますと、見渡す限り、乾燥した大地が広がっておりました。その北西に位置する黄土高原では、さらに乾燥、砂漠化が深刻化していると言います。いつ果てるともない茶褐色の大地に一本一本木を植える、気の遠くなる話だというのが正直な感想でした。そのとき、プロジェクトパートナーの孫先生がこうおっしゃいました。「大昔、ここは緑でした。何百年、何千年という年月をかけて、人間の営みが緑を消してしまいました。そのために生態系は損なわれ、土地は痩せ、人の営みさえも脅かされ始めています。私たちは、何百年、何千年かけてでも、地球を蘇らせなくてはなりません、その第一歩は、ひとりでも多くの人が問題に気づき、理解することです」。御年89歳の先生は村々を訪ね歩き、自分たちが直面する現実を説き、仲間をひとりずつ増やし、確実に植林サイトを広げておられます。

わたくしはこの訪問で、プロジェクトサイトでの環境劣化の実態やそれに纏わる様々な問題、そして実際に「問題」に取り組んでいる様子などをできるだけたくさん、そしてきちんと社会に伝えること、それがここ日本において、「エコ」カード基金の果たすべき大切な役割のひとつではなからうかという思いを抱きました。

この報告書やホームページなどを通して、少しでも皆さまに現場の空気をお伝えすることができればと思います。そして、(気の遠くなるような)地球環境保全、即ち「ずっと暮らせる地球」の実現に向けたさらなる「一歩」に繋がることを願っております。

皆さまの温かいご支援に今一度感謝申し上げますと共に、今後とも変わらぬご協力をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

コスモ石油エコカード基金
理事長 森川 桂造



左:孫先生、中央:劉氏、右:森川

『ずっと地球で暮らそう』

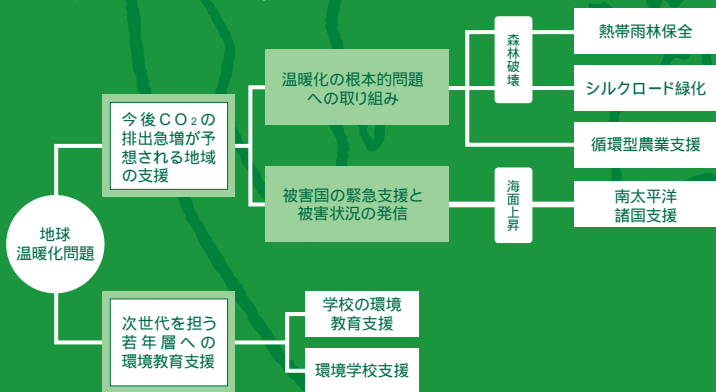
『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトは、コスモ・ザ・カード「エコ」会員の皆さまや、NGO、地域社会・政府の方々、そしてコスモ石油と一緒に取り組む環境修復・保全を目的としたプロジェクトの総称です。『ずっと地球で暮らそう。』のキャッチフレーズには、豊かな地球を後世まで残していきたいという思いが込められています。

[プロジェクトのテーマ]

『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトは、石油と関わりの最も深い環境問題「地球温暖化防止」をテーマに、今後CO₂排出の急増が予想される地域（途上国など）の持続的な発展に向けた支援と、これからの地球を担う子どもたちへの環境教育、の2つの切り口から展開しています。

[地球温暖化防止]

私たちの暮らしを支えるエネルギー、石油や天然ガス、石炭などの化石燃料は、使用時に地球温暖化の原因となる二酸化炭素を発生させます。この二酸化炭素は、車に乗るときにも発生します。石油を供給するコスモ石油と、石油をお使いになる「エコ」会員の皆さままで進めている『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトでは、私たちに共通で、最も関わりの深い問題である環境問題「地球温暖化」の改善に資する活動を中心に活動しています。



基金の活動は、会員の皆さまとコスモ石油の寄付金に支えられ、NGOや活動サイトの住民の方々などとのパートナーシップの中で、環境保全活動を展開しています。

コスモ石油エコカード基金では、ひとりでも多くの方と地球環境保全の大切さを共有し、「環境」の環を広げていきたいとの思いから、コスモ石油のテレビコマーシャルや新聞・雑誌広告、各種イベントを通して、『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトを始めとする環境への取り組みや、環境問題の実情などを広く発信しています。

そう。』プロジェクト

コスモ石油エコカード基金

■ 2004年度トピックス

プロジェクト評議会を開催

基金では初めて、外部の専門家の方々にご意見やアドバイスをいただく場を持ちました。会員の皆さまのご寄付がどのように使われ、効果を生んでいるかをしっかりと伝えることの重要性が指摘され、コミュニケーション活動の一環として、ホームページ「コスモ・ザ・カード『エコ』広場」の充実やメールマガジンの発行を始めました。

コミュニケーション活動の充実

コスモ石油エコカード基金のホームページ、「コスモ・ザ・カード『エコ』広場」に、最新の活動状況をお伝えする「活動レポート」の掲載を始めました。また、ネット会員にご登録いただいている会員の方にはメールマガジンでの情報発信を始めました。

■ 収支報告

預金利息等
389円

クリック募金
4,872,055円

コスモ石油拠出金
31,002,904円

04年度
収入合計
74,914,681円
03年度繰越金
32,838,626円

カード会員拠出金
39,039,333円

評議員謝礼
61,365円

環境学校支援
15,002,520円

学校の環境教育支援
9,127,233円

南太平洋諸国支援
5,692,232円

04年度
支出合計
63,887,025円
04年度繰越金
43,866,282円

熱帯雨林保全
(バブアニューギニア)
15,001,575円

熱帯雨林保全
(ソロモン諸島)
18,001,260円

シルクロード緑化
500,420円

循環型農業支援
500,420円

熱帯雨林保全のために、 定地型有機農業の普及を支援しています。



左上)実りをつけた稲穂(パプアニューギニア)
右上)陸稲の田植え(ソロモン諸島)
右中)収穫を喜ぶ子ども(パプアニューギニア)
左下)肥料作り(ソロモン諸島)
右下)養豚小屋(ソロモン諸島)

パプアニューギニア・ソロモン諸島では焼畑が広く行われています。

伝統的な焼畑は自然の循環の中で行われていましたが、近年、人口の急激な増加や食生活の嗜好の変化に伴い、自然の循環の枠を超えた過度の焼畑が進み、熱帯雨林の破壊の原因の一つとなっています。

これらの国では焼畑によるイモ栽培が食生活の中心でしたが、近年ではその味、そして保存可能期間の長さから米食の慣習が進んでいます。

米の自給の推進は農村部の人々の限られた現金収入を守るという効果もあります。

私たちは事前に繰り返し現地での調査を実施し、農村部の人々の稲作への熱意の高さを確認し、定地型農業を軸とした農村開発支援を行うことを決めました。

基金では、森林の保全と安定した食料生産、さらには雇用の確保を実現可能にする、農村部での定地型有機農法の普及を通してこれらの国への支援を続けています。

❖ パプアニューギニア

これまでの活動

パプアニューギニアはオーストラリアの北東、赤道近くに位置する国です。これまで、プロジェクトパートナーである(財)オイスカと協働し、ラバウルのエコテックセンターでの「人づくり」を中心に支援活動を展開してきましたが、実際には技術を学んだ「志」の高い若者が村に帰るとスコープつない現実が待っている、そんな話を聞き、定地型農業普及の「ひとおし」として精米機寄贈、精米小屋設置や有機肥料を作るための小屋の建設を所要所で実施しました。

2004年の活動

エコテックセンターでの技術者育成プログラム支援とモデル研修農場運営の支援を行いました。また、農村開発は同国も国策として注力していることから、同国政府(農業畜産省、貿易産業省、州政府等)から当基金の活動への全面的な支援を得ることができました。また、2月に同国ソマレ首相が来日された際には、首相と当基金の活動について意見交換を行い、同国での活動はさらに磐石なものとなりました。

今後の活動

2005年度も人材育成と施設の自立運営支援を実施していきます。また、これまでに設置した精米機などを自分たちで保守できるだけの現金収入と活動の持続性を得るため、緑のダイヤとも言われるパニャや、健康増進に効果があると注目されているノニなどの作物開発も支援していきます。



❖ ソロモン諸島

これまでの活動

ソロモン諸島はパプアニューギニアの東に位置する島国です。気候も土壌も農業に適した豊かな自然に恵まれた国ですが、90年代の民族紛争により外国からの支援が減り、貧困が加速した状態にあります。また、同国も人口圧による過度な焼畑が進んでいます。私たちは最大の人口を有するマライタ島のフィユ村をモデルビレッジとし、村人を中心に、プロジェクトパートナーであるNPO法人APSDとともにこれを実現するための施設(パーマカルチャーセンター)を建設しました。

2004年の活動

センターの施設拡充を行い、研修生が最大80名宿泊できる宿泊所の建設を支援。これにより、遠方からの研修生を受け入れる体制が整い、成功事例を水平展開していく仕組みが完成しました。また、センターでは取り組みの持続性を高めるため、水稲への挑戦・木炭製造による森林保全(生焚きによる木材消費が少ない)や、養蜂やノニ栽培などの換金作物への取り組みを始めました。私たちは現地でも同国のケマケザ首相と会談。基金の活動は同国政府によく認識されており、ソロモン政府としての全面的な支持をいただきました。



今後の活動

今後も、パーマカルチャーセンターを中心に、定地型有機農法の普及を支援していきます。モデルビレッジの成功例を各地に水平展開するための人材育成がその中心的活動です。また、灌漑設備の整備を支援していく予定です。

温暖化がもたらす海面上昇による 危機に直面する南太平洋島嶼国を支援します。

■ キリバス共和国

これまでの活動

起伏がなく、川のない同国では、飲料水の確保が重要です。そこで、私たちは降水を利用する、雨水貯蔵タンクを設置しました。また、温暖化に起因する降水量の急増により、主要な産業である製塩業が「塩が乾かない」という深刻な状況に陥っていることから、移動可能な、乾燥用のプラスチックトレーと海水移動用ポンプ一式を設置しました。



海岸の浸食が進んでいる

2004年の活動

海岸線の浸食抑制に効果があり、また、防潮堤としても機能するといわれるマングローブの植林に向けた準備を行いました。より確実に、効果を生む活動にするため、同国政府や地元住民、特に学校との協議を重ね、現地のネットワークを作ることができました。また、多種多様なマングローブの中から適した種類を選定したり、植林時期を特定するための調査を実施しました。

今後の活動

04年度の事前調査で、地元では温暖化問題や環境保全についての意識啓発が課題の一つとなっていることが分かりました。05年度は、マングローブ植林と、それを通じた現地の子どもに対する環境啓発活動を行う計画にしています。プロジェクトパートナーである、国際マングローブ生態協会(ISME)、NPO法人APSDとともに植林、および環境啓発ツールの作成を行う予定です。

■ ツバル共和国

2004年の活動

キリバスの隣国である同国は国土が小さく、より地下水が乏しいため、問題はさらに深刻です。私たちは現地で調査と政府(総理府・環境省ほか)との綿密な打ち合わせを行いました。

今後の活動

既に飲料水の供給が不能な地域が増えており、飲料水の確保が緊急の課題である同国へ、給水車の寄贈を行う予定です。これにより、ツバル政府保有の雨水タンク及び淡水化プラントからの飲料水の配送が可能になります。



沙棘(サージ)の植林を通して、 砂漠化防止と地域の持続的発展を目指します。



植林の様子

プロジェクトの舞台、シルクロード上の西安から新疆ウイグル自治区にかけては、太古の昔には豊かな緑が広がっていたと言われていますが、長い年月の間に、生活のための過度な開発などで砂漠化が進行しています。近年、その影響とされる農作物の不作や自然災害の多発が、地域の人々の生活を脅かしているとの報告も聞かれます。この一帯の砂漠化防止と地域の生活安定を目指し、換金性の高い実をつける沙棘の植林を、NPO法人2050とともにを行っています。シルクロードの起点、陝西省西安近郊からスタート。西方の新疆ウイグル自治区を目指します。

2004年の活動

03年度に引き続き、西安市近郊で植林活動を実施

03年度の植林で成果の見られた陝西省陽泉張家山で、04年度も引き続き沙棘の植林を行いました。約18,000本の沙棘を植林、03年度と合わせると約33,700本になります。

沙棘のマーケティング

沙棘の実にはジュース、種は油、絞り粕は漢方薬として商品化できます。沙棘は植林後2～3年で実を結ぶため、最初に植えた木は早ければ来年には果実します。

04年度は沙棘加工工場の下見をするとともに、販路開拓の準備をしました。

西方に向けて

植林を進めるためには、地元農民の主体的な参画や行政のサポートが不可欠です。植林を西方に拡大するため、04年度は、甘肅敦煌市に足を伸ばし、農民代表、政府関係者と会合を実施。陝西省=甘肅省=新疆ウイグル自治区を結ぶ沙棘ネットワークの布石を打つことができました。

今後の活動

既に植林を始めたサイトで、植林とその管理を継続すること、最終的には新疆ウイグル自治区までのシルクロード沿いに植林地を拡大すること、植林した沙棘の実や種を商品化し、農民が収入を得ることのできる状態にすること、この3つの達成を目指し、継続して取り組んでいきます。



環境保全と貧困解消を目指して、 養蚕と織物による循環型社会システムの 定着を図っています。



左)糸つむぎの訓練
右)エリ蚕

ここ、フィリピンパラワン島でも、貧困問題と環境破壊は表裏一体の問題となって地域の大きな課題となっています。基金では、地域貧困層の生活安定と、自然資源の過剰利用(過度な森林伐採など)の防止を目指して、パラワン島首府プエルトプリンセサ市を中心に、これまで捨てられていたキャッサバ(タピオカ)の葉でエリ蚕の養蚕を行い、その繭から絹製品を生産、販売する、循環型の農業/産業システムの定着と普及に、NPO法人2050とともに取り組んでいます。2004年度は港町のポートパートンの活動にも着手しました。

2004年の活動

02年度から活動を始めているプエルトプリンセサ市では、基本的な技術・機材(糸紡ぎ機・織機・編み棒等)が整ってきたことから、製品を輸出レベルに引き上げるための指導員を日本から派遣し、品質向上に向けた研修を行いました。製品自体はもう少し改善が必要ですが、地元の女性を中心に人々の意識は高く、研修生の内3名以上が自らトレーナーとなって基礎的な訓練を施すことのできる状態にまで成長。次のプロジェクトサイトであるポートパートンで指導を始めています。ポートパートンでは日本からの糸紡ぎ機を複製、練習に取り掛かりましたが、「収入」を急ぎすぎたためか粗悪品を大量に生産するという悪循環に陥ってしまいました。「売れる」製品作りに向けた練習の継続と、都市部のホテルや土産物屋などを通じて観光客を対象に市場・販路を開拓することが課題です。

今後の活動

プロジェクトのサポーターである地域の代表や教会関係者との交流の中で、特に北部地域で森林に貧困農民が入り不法伐採を行っており、対応に苦慮している現状が指摘されました。05年度は2つのプロジェクトサイトでの活動を推進するとともに、「環境保全と貧困」をテーマに地元との対話を進め、基金としての協力のあり方を模索していきたいと思ひます。

日本各地のNGOとともに、教育の現場、「学校」での環境教育を支援しています。

今、車を運転する世代、「エコ」会員の皆さまが子どもだった頃に比べて、教育の現場である学校では「環境教育」が進んでいます。学校で行う環境教育のお手伝いをし、子どもたちの中に自然を大切に思う心を育むこと、それがこのプロジェクトの目的です。自然体験プログラムなどのノウハウを持つ日本各地のNGOと、ノウハウや機会を探している学校とのマッチングを行い、互いの長所を生かして、より効果的な環境教育プログラムを実施できるよう、パートナーである日本環境教育フォーラムとともに取り組んでいます。



| 学校 | NGO | テーマ |
|-------------------------|-----------|--------------------------------|
| 川崎市立桜本小学校 6年生 (神奈川県) | NPO法人APSD | 棚田から農業/食糧/ 途上国問題を考える |
| 札幌市立福住小学校 6年生 (北海道) | NPO法人ねおす | 自分達が生活する地域の 豊かな自然を知る |
| 浦添市立宮城小学校 4年生 (沖縄県) | エコライフ | 沖縄の自然に五感で触れ、 感性を培う |
| 東員町城山小学校 6年生 (三重県) | 大杉谷自然学校 | 海を題材に、日常生活でできる 環境問題の解決策を考える |

2004年度の活動

04年度は、4つの地域の4つの学校でプログラムを行いました。また、それぞれの経験を発表し、共有するためのWEBサイトも立ち上げました。

今後の活動

「環境教育」という言葉自体、幅広い意味を持ち、捉え方も人によって様々です。初年度であったこともあり、進めていく中で、プログラムの内容や進め方、学校とNGOの役割の担い方など、様々な意見が集まりました。05年度は貴重な意見を生かして、プログラムの改善を図りながら、6つのプログラムを7つの学校で展開して行く予定です。

WEBサイト「EEキッズ」

体験学習が中心となるプログラムは一過性のものになってしまう可能性もあり、子どもたちの中に芽生えた環境に対する関心が続かないのでは、という問題意識から、体験を発表しあったり、子どもたちとNGOが交流したり、学校をこえて子どもたちが情報の共有を図れるWEBサイト、「EEキッズ」を立ち上げました。

このサイトを利用する学校やNGOを増やし、また、学校の授業の中でも使っていける「環境教育ツール」に育てていきたいと思えます。サイトは環境gooの協力を得て、環境関連では最も有名な情報サイト、「環境goo」のなかに置きました。使う人が気軽に使えるよう、「エコ」基金色を出さないデザインになっていますが、よく見ると1ページ目にこっそりロゴマークが入っていますので、ぜひ一度サイトを覗いてみてください。



URL <http://eco.goo.ne.jp/education/eekids/>

内容

工業地帯に隣接する地域の子どもたちが、長野県三水村の協力のもと、棚田での田植え、草刈り、稲刈りなどの実地体験と、学校での経験(授業、学校での水田作り、文化祭での発表など)を通して、1年間、環境/農業/食糧問題から、地球規模の途上国問題に至るまで、しっかりと環境に向き合いました。

札幌は森が広がり野生生物が生息する「自然」と、180万人が生活する「都市」が接する町ですが、子どもたちが自然に接したり、環境を意識したりする機会が減っていると、最近指摘されています。8月に地元の自然の中でウォークラリーや沢探検、自然観察を行い、子どもたちが身の回りの自然に「気づく」きっかけ作りになりました。

昔ながらの稲刈りや脱穀、里野の自然観察、海の観察、星空観察、やんばるの多様な生態系の学習など、様々な自然に五感で触れる、体験中心のプログラムを11月に行いました。

当初、「山」を題材にプログラム作りを進めていましたが、台風の影響による土砂崩れなどで、急遽、テーマを「海」に替え、2月に行いました。学校での学習や発表と、伊勢志摩に近い海での自然体験を通して、生態系や環境ホルモンなどの問題を、漂着物などの身近な素材から考えました。

環境学校支援プロジェクト

Japan

環境に対し自ら行動できる
『環境メッセンジャー』の育成に取り組んでいます。

地球上のあらゆる地域で、異常気象や生態系の破壊、動植物の絶滅などが報告されています。これからの地球を考えると、地球環境を大切に考え、環境活動を実践し、それを広めていける人が必要です。

そんな「人」を持続的、継続的に育てることを目指し、NPO法人セブンサミットと一緒に日本各地で環境学校を開催、「自分から行動し、メッセージを発信できる人、“環境メッセンジャー”」を育てる活動を進めています。



04年度の環境学校報告

| 開催地 | 日程 | 参加者数 | 年齢幅 |
|-----|-----------------|------|---------|
| 富士山 | 2004年7月26日～31日 | 34人 | 10歳～16歳 |
| 白神 | 2004年8月18日～21日 | 11人 | 17歳～22歳 |
| 屋久島 | 2004年12月26日～28日 | 13人 | 16歳～21歳 |
| 小笠原 | 2005年3月26日～31日 | 16人 | 12歳～17歳 |

メッセンジャーミーティング

| | | | |
|----|------------|-----|---------|
| 東京 | 2005年1月30日 | 34人 | 10歳～22歳 |
|----|------------|-----|---------|

環境学校とは

03年度から行っている環境学校では、「気づく」「考える」「動く」の3つの循環を学習して、最終的に「自ら動き」「自ら発信する」ことに繋げることを目標としています。

基本プログラムは、まず、自然そのものや、自然と人の関わりの「良い所」と「悪い所」を両方体験、毎日夕刻に「ふり返りの時間」を持ち、その日に気づいたことや感じたこと、「もっとこうすれば良いのでは」という自分なりの解決策などをディスカッションし、仲間に発表。各サイトから普段の生活に戻ってからも、家や学校でどのような工夫をしているか、ほかの人にどのようなメッセージを発信しているかをレポートする、そして一連のメッセージをWEBで発信する、という構成になっています。

環境学校に参加した子どもたちのメッセージを、セブンサミツのホームページから読んでいただくことができます。

2004年の活動

富士山、白神、屋久島、小笠原の4ヶ所で環境学校を開催、74名の環境メッセージャーを育てました。(環境学校の概要は下の表をご覧ください。)

環境メッセージャーとしての活動

04年度は基本プログラムに加え、各環境学校の参加者が東京に集い、「メッセージャーミーティング」を行いました。全国に散らばる参加者の約半数が集まり、自分達のその後の環境活動を報告したり、地球温暖化をテーマに学習し、自分の生活の中の問題点や、反対に「ちょっとしたできること」を見つけたりました。

また、03年度に参加した高校生など高学年の生徒たちが、今度は運営の補助スタッフとして参加するケースもありました。教えるためには伝える以上の経験が必要になり、これも個人学習の一環です。同時に、「環境メッセージャー」としての行動とも言えます。

今後の活動

継続して環境メッセージャーを育てていきます。が、04年度の活動を通して2つの課題を見つけました。一つは、「環境学校卒業生=環境メッセージャー」ではないということ。反対に、環境学校卒業生でなくても、行動し、メッセージを積極的に発信している人は「環境メッセージャー」です。

もう一つの課題は、社会に対して発信する機会が少ないということです。環境メッセージャー認定基準と、社会に対する発信の場、この2点について特に考えながら、05年度も各地で環境学校を開催してまいります。

| プログラムテーマ | プログラムテーマ | ACTIONS |
|----------|-------------|-----------------|
| ゴミ問題 | エコロジー&エコノミー | 富士河口湖町への提言 |
| 自然との共生 | 入山等の規制法 | 登山道整備 |
| 観光と環境 | トイレ | ポスター貼り |
| エコツーリズム | 公と個の環境保護 | 自転車廃棄 |
| 食 | 地球温暖化 | 一人一人の地球温暖化議定書作成 |

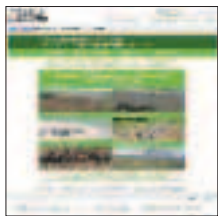
Information

お知らせ

クリック募金をご存知ですか？

『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトを一つ選んでクリックすると、自動的にご本人に代わってコスモ石油がそのプロジェクトに1円を寄付する仕組みです。2年間で約6,643,210回のクリックがありました。

クリックされる方にお金はかかりません。
1日1人1クリックのみ有効。



URL www2.cosmo-oil.co.jp/kankyo/charity/index.html

コスモ・ザ・カード「エコ」広場

「エコ」会員の皆さま専用のホームページ「旬報エクスプレス」を、2005年2月からスタート。さらに、ネット会員にご登録いただくことで、いち早くメールマガジンや「旬報エクスプレス」で関連情報をお届けします。



URL www.cosmo-oil.co.jp/kankyo/eco/index.html

「エコネット」

2003年度にスタートしたコスモ石油の環境教育サイト「エコネット」に、『ずっと地球で暮らそう。』プロジェクトがお子さまにも分かりやすいコンテンツとなって2005年度2月から加わりました。

下記URLから「エコレポート」ボタンをクリックしてご覧ください。



URL www2.cosmo-oil.co.jp/econets/index.html

ネット会員限定ホームページ 「旬報エクスプレス」とメールマガジン

コスモ・ザ・カード「エコ」広場では、プロジェクトの概要や年度活動報告のほか、2004年度からは随時活動レポートを掲載。

いつでも最新情報をご覧いただけるようになりました。

ネット会員への登録方法

パソコンのメールアドレス・「エコ」カードをご用意の上、下記にアクセスしてください。

URL [カード公式サイト] ザ・カード・ドットコム www.cosmo-thecard.com

CO₂フリーガソリン

コスモ石油では、オーストラリア南西部で5,100ha(山手線の内側の広さ)のユーカリの森の育成を支援しています。コスモ石油ではこの森が吸収したCO₂を、2002年度に24,000トン、2003年度に47,489トン、排出権として取得、2003年度に取得した排出権のうち15,819トンを、会員の皆さまが2004年12月に給油されたガソリン(6,097kl)と軽油(657kl)から排出されたCO₂(計15,819トン)に充当しました。これは、ガソリンと軽油から排出されたCO₂15,819トンが、この森に吸収されたことを意味します。

石油を使うことは即ちCO₂を排出することですが、石油を使わない生活は今の私たちには困難です。CO₂フリーガソリンを通して、皆さまと温暖化防止に向けてできることの可能性を考えていきたいと思えます。

当社が取得した排出権はノルウェーの森林管理会社ヤコプリ社と、朝日監査法人(現あずさサステナビリティ株式会社)の検証を受けています。



この報告書は、コスモ石油提供で作成し、エコカード基金に寄せられた会員の皆さまの寄付金は使用していません。

制作

コスモ石油株式会社

〒105-8528 東京都港区芝浦一丁目1番1号東芝ビル
TEL 03-3798-3134
<http://www.cosmo-oil.co.jp/>



二酸化炭素吸収証書

会員の皆さまが2004年12月に給油されたガソリンと軽油から発生するCO₂が、オーストラリアの森に吸収されたことをお約束する証書です。

